ブック村だより

本学コレクション紹介(6)
『算術、幾何、比と比例大全』初版，1494年(その3)
……高橋　哲雄（1）
私の図書館経験 ……菊池　光造（2）
ぶっくす・なう ……（4）
『探偵家族』　谷岡　一郎
『新版　セブン−イレブンの経営史』　中野　安
『復讐総会』　佐和　良作
『オホーツク街道』（「街道をゆく」38）　下山　晃
学生の声 ……植村　徹（6）
山田　和宗
調査のためのツール紹介 ……（7）
インフォメーション・開館案内 ……（8）

※

本学コレクション紹介(6) ルカ・パチョーリ
『算術、幾何、比と比例大全』初版, 1494年(その3)

『大全』の著者をめぐる真相は、今となっては霧のなかである。二つのことだけを記しておこう。

一つの可能性は、ヴァザーリのいう盗作は別の著作『黄金比について』(1509) を指すという見方である。ピエロの功績であるアルキメデスの第六の準正多面形の再発見がそこに登場することは、マンキェヴィチの『図説・世界数学史』に出てくる。だが、それが剽窃(ひょうせつ)とは明記されていない。

もう一つは時代の空気である。当時の数学者の地位や収入は有力なパトロン次第で、それはまたいつどこで行われるかわからぬ公開数学試合の結果にかかっていた。「数学師」といわれる才人たちは効果的に勝を収めるため、自分の発見や師からの秘伝、ときには他人から盗んだ解法を伏せておいた。論文の公刊のタイミングや形式もそうした効果をねらった。そんな時代の師弟間の奥義の継承は微妙に入り組んだ影の領域に属していたのではなかったか。　（名誉教授・高橋　哲雄）

※「修道士ルーカ・パチョーリの肖像」ヤコボ・デ・バルバリ，1495年
マリリン・アロンバーグ・レーヴィン著『ピエロ・デッラ・フランチェスカ』岩波書店，2004.2

私の図書館経験

このたび図書館にかかわることになり、商大新図書館を改めてゆっくり見て回ったが、その間に、これまでの私自身と図書館とのふれあいが断続的に脳裏に浮かんできた。

学部学生当時の京大図書館は、高い天井と黒ずんだ大きな読書机が目立つ建物だった。机にスタンドはついたが、やはり暗く、重厚ではあるがやや陰鬱な雰囲気であった。しかし、そこでは時が静かに流れていた。社会全体を揺るがせた「警職法」（警察官職務執行法）導入反対運動から、「60年安保」（第一次日米安保条約改定）をめぐる喧騒の中に身をおきながら、私が時に自分を見つめる時間を持ったのも、この旧図書館の中だった。そこでは法学部の友人が、重厚な机に向かって、２回生のときからすでに司法試験に向けての勉強に取り組んでいる姿があった。また文学部の友人が静かに中国文学の書物を広げている姿があった。こうした雰囲気の中で、自分はこのままでよいのだろうかと激しい焦燥と内省の時を持ったのを記憶している。

大学院生時代から、国際比較の視点をもってイギリス産業・労働の歴史と現状分析を研究課題としてきたが、60万冊の蔵書を持ち、研究図書館的機能が強い京大経済学部図書館には大いにお世話になった。ここには、ビュッヒャー文庫、マイヤー文庫など著名なコレクションがあり、他方では昭和初年の日本で大きな影響力を持った経済学者河上肇の蔵書からなる「河上文庫」があった。また、朝日新聞社主一族の上野精一氏をはじめ２代にわたって寄贈を受け続けた「上野文庫」は、世界の初期新聞から現代に至るまでの膨大なジャーナリズム関係の大コレクションであると同時に、哲学から社会科学にいたる幅広い内外文献の宝庫でもあった。もとより私は、そうした蔵書群のほんの一部分を垣間見たに過ぎなかったのだが、積み上げられた知的資産の大きさ、図書・資料の蒐集に表れる先人たちの学者としての視野の広さに圧倒されたものである。

私にとって忘れられないのは、イギリスでの図書館との出会いである。というと、多くの人が大英博物館とセットになった大英図書館（いまはキングスクロスの新館に移転している）を思い浮かべるかもしれないが、私にとってはよりマイナーなローカルタウンの公共図書館がまず思い浮かぶ。1978年から79年にかけて、私は東京大学社会科学研究所にベースを置く、海外労使関係調査団に参加し、イギリスに滞在した。自動車産業班は緑したたる学都オックスフォードに居を構え、ブリティッシュレイランドの工場を中心に調査をおこなっていたが、私の鉄鋼業調査班は「文化果てる土地」と揶揄される鉄鋼町スカンソープに定着した。シェフィールドからローカル線で１時間ほど入る鉄鋼町、日本でいえばかつての釜石にあたるとでもいえようか。そこでパブの２階の簡易ホテルに住みつき、毎日自転車で製鉄所へと通い、労務課の生の資料ファイルを読み、毎日数時間におよぶヒアリング調査を４ヶ月続けた。こうしたローカルタウンにも地元の図書館があった。ごく小規模の住民図書館だったが、そこで思いがけないものに出会った。

鉄鋼町なので、地元の製鉄所関連および背景としての鉄鋼産業全体に関連する新聞記事の克明な切抜きをファイルしたもので、これは製鉄所の現状を分析するためのバックグラウンド情報として実にありがたいものだった。こちらは海外出張の限られた期限の中で必死に資料・情報探索をしていた折でもあり、ファイル全部をコピーしようと10ペンスコインを袋で持ち込み１台しかないコピー機を占領してコピーに取り掛かった。あまり頑張ってコピーをし続けたので、図書館の婦人職員

にコピー機を独占しては困ります、とたしなめられることにもなったが、今となればそれも思い出のひとこまである。

この調査の過程では、二つの「専門図書館」の世話にもなった。一つはロンドン北郊のコリンデール図書館であり、これは国際版も含めて、あらゆる種類の新聞を蒐集している新聞図書館であった。この図書館で終日イギリス経済・産業・労働の現状について、情報を読みふけったものである。いまひとつは、イングランド中部のウォーリック大学図書館に付随するModern Record Centreである。これは現代史資料センターとでもいうべきか、さまざまな企業や団体、労働組合などから生の内部資料の寄贈・寄託を受けてこれを整理保存して研究者の利用に供するものであり、専門職員が資料の所在をリサーチし収集の交渉に尽力していた。このときは、われわれの調査研究テーマに関してお世話になったわけだが、約20年経って1998年に再訪したときには、このセンターが図書館から独立した大規模な建物を持つまでに発展しているのを見て感無量の思いをしたものである。

1985年から86年にかけては文部省在海外研究でドイツに２ヶ月、イギリスに８ヶ月滞在した。ゲーテの生地フランクフルトの「社会研究所」では、夏のバカンスで研究者はみな出払っており図書館をほとんど独り占めにした感じだった。朝は駒鳥の声に起こされ、夕暮れに帰るときにはナハティガルの歌を聴くといった具合で、図書館と宿舎の間を往復する至福の時間を過ごすことができた。

イギリスではこの時やっと文明の地ロンドンに居を構え、先年来の鉄鋼業調査のフォローアップを行うとともに、ロンドンスクール・オブ・エコノミクス（LSE）の図書館に通って、年来私のテーマであるイギリス産業・労働史の研究を続けた。世界各地から優れた学生がつどう大学院大学LSEの図書館は建物も旧く、決して快適な空間ではなく、少ない座席をめぐっていつも学生たちの席取合戦が行われていた。しかし当然のことではあるが、社会科学全般に渉る蔵書は、目を見張るものがあり、特にイギリス研究を仕事とするものにとっては垂涎の図書・資料が蓄積されていた。図書館の中に１坪強のリーディングルームをもらい、勝手に何冊でも図書を持ちこんで使ってよいというのは、考えてみれば破格の待遇だったのかもしれない。しかし、その分私も何か大学院でレクチャーをせねばならないということになり、「日本的労使関係の変貌」をテーマに選んだ。ちょうど日本からイギリスへの進出企業のインパクトもあり、国際的に「日本的経営」への関心が高まっていた時期でもあり、国際比較のオムニバス講義の一環に組み込まれた私のレクチャーはかなりの盛況で、自分にとっても緊張する挑戦だったが、著作を通じて名前を知っていた専門研究者が質問に立つなど、張り合いのある経験だった。

図書館にまつわる思い出を記しているうちに、与えられた紙幅も尽きてしまった。その後1998年４月から２年間、京都大学図書館の館長を勤めたが、それまではもっぱら利用者としてのみ関わってきた図書館を、内側から見るという得がたい経験をすることができた。これからは商大図書館にかかわることになるが、このすばらしい図書館環境のもと、少しでも利用者の皆さんにとって使いやすい図書館になるようにお手伝いができればと考えている。　（図書館長　菊池　光造）

『探偵家族』

（ハヤカワ文庫，2003.12）
マイクル・Z・リューイン 著，田口　俊樹 訳

イギリス郊外、バースに住むルンギー家は、親子３代にわたる探偵業ファミリー。しみったれで皮肉屋のおじいちゃん、心配性のおばあちゃん、芸術家肌で探偵業をやりたがらない兄、ラブ・ロマンスに夢中の妹、やんちゃざかりの子供たちの中で探偵業を支える働きものの次男夫婦。こうした一家が織り成す人間模様の物語である。謎解きより、ほのぼのとした物語として読んでもらいたい本だ。この続編『探偵家族―冬の事件簿―』は文庫ではなく、ハヤカワのポケミスで今年１月に刊行された。こちらも「あっ」という間に読み終えるだろう。

マイクル・リューイン作のもので、もっと謎解きを楽しみたい人はアルバート・サムスン・シリーズがおすすめだが、リューインの真骨頂はよりハード・ボイルド・タッチのパウダー警部補シリーズである。『夜勤刑事』、『刑事の誇り』、『男たちの絆』と続くこのシリーズは、古き良き時代のタフで頑固だけどやさしい、そして背中に哀愁がただよう「男」の物語である。古いと笑う人もいるかもしれないが、パウダー警部補の人柄に惹かれる人がほとんどだと信じている。まあとにかく、どれでもいいからマイクル・リューインを一冊手に取って読んでみられよ。

（学長　谷岡　一郎）

『新版　セブン−イレブンの経営史』

（有斐閣，2003.5）
川辺　信雄 著

流通分野、とくに小売分野は長年、農業とともに国際的にみて日本における最も遅れた産業分野の１代表とみられてきた。その状況は、1960年代以降のGMS（総合スーパー）の巨大な発展によって多少解消したものの、繊維、鉄鋼、家電・エレクトロニクス、自動車等製造業のさまざまな分野が次つぎと世界をリードしたのに対し、グローバル・スタンダードとなる小売業態を開発したことは一度もなく、アメリカで開発された新鋭業態を模倣するにとどまっていた。

ところがコンビニだけは稀有な例外をなす。その代表たる日本のセブン－イレブンは、ライセンス供与を受けたアメリカの親会社を逆に傘下に収め、再建を成功させたほどである。その成果をみて――革新的生産システムを学ぶため「トヨタ詣で」が行われたように――海外の経営者や研究者がしばしば見学にくるし、アメリカ等の院生が博士論文のテーマに取り上げるほどになった。

ではなぜ同社はこのような世界最強の業態を開発できたのか。その秘密を解き明かす本書は、アメリカにおけるコンビニの成立と発展、それとも関連する日本のセブン－イレブンの誕生から今日までの発展・変身過程を、競争力の源泉としての「組織能力」の視点から詳細に分析した労作である。

（総合経営学部 教授　中野　安）

『復讐総会』

（新潮社，2004.2）
江上　剛 著

バブルの崩壊後、企業や銀行に絡んだ犯罪が頻発している。著者は、第一勧業銀行（現みずほ銀行）の銀行員で、退職後小説家としてデビュー、これが３冊目の単行本である。

銀行員として実際に起きたさまざまな経済事件をつぶさに見てきただけに、いずれも具体性に富み、読んでいると新聞やテレビで大きく報道された実際の事件を思い起こさせてくれる。

最新刊である『復讐総会』は５本の短編によって構成されているが、いずれも主役は改心した元総会屋と元刑事の二人で、この二人がコンビを組んで勇敢に悪に挑戦し、全て勧善懲悪、ハッピーエンドで締めくくられている。現実に起きた事件を題材にしているとはいえ、現実の事件は必ずしも勧善懲悪、ハッピーエンドの結末を迎えているわけではないところが大きく異なる。おそらく著者はこの本の題材とした事件を傍観しながら、現実の悲惨な結末とは異なる、不幸な人たちが救われるような結末を常に期待していたに違いない。

株を買い占めて企業に増配を迫る投資ファンドが実は暴力団のマネーロンダリング機関となっていたという話、システム統合の不具合に伴うシステムエンジニアの過労死に対する冷たい銀行の態度を取り扱った話など、いずれも面白く一気に読み進むことができる。文章も平易である。実社会の裏に潜むドロドロとした汚さを知っておく上でもぜひ一読すべきである。

（経済学部 教授　佐和　良作）

『オホーツク街道』
（「街道をゆく」38）

（朝日文庫，1997.2）
司馬　遼太郎 著

大商大のすぐ近く、小阪～八戸ノ里駅の間のトイザラスの道を南へ５分も歩けば、「司馬遼太郎記念館」が建っている。青雲の志を抱く若者は、必ず訪れなくてはならないナニワの聖地である。しかし行ってみると、いつも中年のおじさんやお年寄りばかりが目立っているのが、何となく奇妙で、一種、淡泊に過ぎる感じ。見学者の中では、お母さんたちの声がイチバンに元気である。

それはともかく、同じ「街道をゆく」シリーズの第15巻、『北海道の諸道』と本書とを併せ読んだ上で、実際に北の異境を訪ねてみれば、タダの物見遊山をたちまちにして、学生時代の「最大最高の想い出」に進化させることも出来るのである。

更に、メディアセンター図書館２階のビデオブースにある「街道をゆく」シリーズのビデオを全部観てみれば、確実に、青雲の志がフツフツと湧いてくる筈である。せめて一度は、全部、観てみられたい。

「先生、サハリン、行ってきたで！」「あ、そ」「次は十津川、その次はモンゴル、そのまた次はアフガニスタンの子供に合気道を教えに行くつもりで、バイト３つしてますねん。勉強も当然、してまっせ！」――そんな若者、必ず居てはる筈である。

司馬遼太郎は『全集』も全部図書館に揃っているし、ビデオもあれば記念館もすぐ近場。こんな恵まれた環境で読書や鑑賞が楽しめるみなさんが、ぼくはホントの本当に、羨ましい次第である。

記念館　雄志を風に　植える春　　響太郎

（総合経営学部 助教授　下山　晃）

『司馬遼太郎と図書館』

比較地域研究科　博士前期課程1年
植村　徹

「また来たんか」、受付係の男に呆きれらながら、ひたすら図書館に通いつめる13歳の少年がいました。学校帰りなのか、いつも制服のままで図書館にやってきては、閉館間際まで本を読み、必ず３冊借りて帰っていく少年。それが後の司馬遼太郎です。

司馬さんは、学徒出陣で徴兵されるまでの７年間、毎日、御蔵跡図書館（現在の中央区日本橋三丁目）に通い続けました。「しまいには読む本がなくなってしまい、魚釣りの本まで読んでしまいました」と、司馬さんは、当時を振り返っています。

しかし、司馬さんが、私たち大阪商業大学のメディアセンター（図書館）に来ていたらと、想像してみてください。おそらく、少年司馬遼太郎は飽きることがなかったでしょう。政治、経済、社会、人文、美術、文学、新聞、雑誌、といった古典的な領域の蔵書に加え、DVD鑑賞、インターネット、ノートパソコンの貸し出し（館内のみ）、リクエストコーナーなどなど、現代社会の多様なニーズに応えるだけのシステムが整っています。

知られるように、復員後、司馬さんは新聞記者として活躍します。その下地をつくった場所はどこだったかと尋ねられた司馬さんは、図書館で黙々と本を読んでいた少年時代だと述べました。

司馬さんの自宅は、大学から10分ほどのところにあります。日課だった散歩コース（うどん屋、喫茶店、書店）は、どれも小阪駅周辺で今もやっています。司馬さんがご存命だったなら、散歩がてらにメディアセンターに立ち寄られたかもしれません。「またあの白髪のおっちゃん来てるわ」と、私たち学生に言われながら。

『私の図書館利用術』

総合経営学部　経営学科2年
山田　和宗

私が大阪商業大学に来て良かったと思う理由の１つとしてメディアセンターの存在があります。これほど施設・資料・サービス等が充実している図書館はそんなに多くはないのでしょうか。この夢のような図書館をほぼ毎日気軽に利用できるということは相当恵まれた環境にいると思います。

私は自宅にいるとテレビ等の誘惑や生活の雑音が気になり集中して勉強することができないタイプです。そのため図書館を調べ物だけでなく勉強場所としても利用しています。図書館はただ静かなだけでなく、周りに熱心に本を読んだり勉強していたりする人がいつ行ってもいるため、そこにいるだけで自然と集中して勉強できる雰囲気があります。こういった場所では１人で勉強していても、そこにいる人達からエネルギーをもらうことができるのではないでしょうか。そのため私は定期試験対策や資格試験の勉強をするとき、まず自宅から外に出て図書館に行くようにしています。

私の場合、自宅でダラダラしている時と図書館で集中している時とではかなり勉強能率に差がついていると思います。自宅を勉強場所としているけれども、なかなか勉強に身が入らないという方はぜひ試しに図書館で勉強してみてはいかがでしょうか。

またこれだけでなくメディアセンターにはパソコンやビデオ・DVDブースなど、大学生活をより豊かにしてくれる機能が揃っていると思います。しかしこの恵まれた環境は利用（ただしマナーは守りつつ）することによってメリットを最大限に生かすことができるのではないでしょうか。

調査のためのツール紹介

図書館には、調べ物を行う手助けとなる「道具（=ツール）」として、一般に辞書・辞典・白書・年鑑・地図などの参考図書（CD-ROMなど電子媒体を含む）や、インターネット、オンライン検索の可能な外部データベースなどが用意されています。

オンライン検索では、豊富な情報源から非常に効率的なデータ収集を行うことができますが、特定の、特に専門的な分野を対象とする場合には、テーマにそってデータのまとめられている「参考図書」の利用により、より充実した検索結果が得られることもあります。今回はこれら「ツール」のなかから、本学主専攻分野の学習に有用と思われる、最近入荷された参考図書より数点と、今年度導入されたデータベースをご紹介します。

「日経ベンチャー企業年鑑」

（日本経済新聞社 日経産業消費研究所 編，2004.1）

国内のベンチャー企業2320社の連絡先・事業内容・業績・規模などのデータや、保有特許や株式公開など各社の特色を知ることのできる情報が掲載されています。本学では1996年より継続購入しています。（本年度「日経ベンチャービジネス年鑑」より改題）

場所：ラベル番号 J335.035/N71

「基本経営学用語辞典」三訂版

（同文舘出版　吉田和夫、大橋昭一 編著，2003.9）

1115項目の経済学用語が新書サイズにまとめられ、体系的な学習を目的とした分野別索引や、見出し語・原典なども収録されています。

場所：ラベル番号 J335.035/N71

「経済新語辞典 2004年版」

（日本経済新聞社 2003.9）

経済記事を読む際に必要な経済用語、新語約3600語が掲載されています。2004年版より、文字が大きく、見出し語が色刷になるなどの改訂がされています。用語解説にとどまらず、最新事情の解説も行われています。

場所：ラベル番号 J330.33/N71

「業種別審査事典」（全8巻）

（金融財政事情研究会 編集・発行　2003.11-2004.1）

各産業・業種（約1140種）別に、市場規模、業況、需給動向、技術動向、業界シェアなど、業界・市場動向の分析に役立つ資料・データが詳しく解説されています。

場所：ラベル番号 J338.55/G99

「ジャパンナレッジ」

（外部データベース、在学生・教職員による学内利用のみ）

小学館グループのネットアドバンス社が提供する「ジャパンナレッジ」は、各種事典･辞書、ニュース、書籍、年表・ビジネス情報源など様々なマルチメディア情報を横断検索できる、総収録項目数約113万、総文字数約10億という巨大な総合データベースのサイトです。学内LAN上の端末であれば、図書館以外の場所でも利用できます。本学図書館のホームページ上からリンクをたどってアクセスすることができます。（トップページより「データベース検索」をクリック）

「ジャパンナレッジ」のURLは下記の通りです。

http://na.jkn21.com/

図書館インフォメーション

◆「ぶっくす・なう」掲載図書のコーナーを設置しました

本誌「ブック村だより」書評欄、「ぶっくす・なう」に掲載されている図書のコーナーを、図書館２階フロア（入口付近）に設置しています。本学学長をはじめ、各分野（経済・経営流通・副専攻・エンタテインメント）のエキスパートである本学の先生方が推薦する図書は、皆さんの研究・学習に大いに役立つことでしょう。是非一度、手にとってみてください。なお、本誌バックナンバーも同コーナーでご覧頂けます。

◆卒論作成用の特別貸出について

４年生の皆さんは、卒業論文作成のための特別貸出ができます。延長手続きを行わずに、１ヶ月借りることができます。希望者は、貸出時にカウンターまで申し出て、手続きを行って下さい。

◆利用できる外部データベースが増えました

ネットアドバンス社提供の「ジャパンナレッジ」は、各種事典･辞書、ニュース、書籍、年表・ビジネス情報源などの様々な情報を横断検索できる総合データベースサービスです。図書館ホームページからリンクをたどってアクセスすることができます。学内LAN上の端末であれば、図書館以外でも利用できます。

◆「国勢調査報告」（平成7年・12年）を移動しました

参考図書コーナーに置かれていた「国勢調査報告」は、５階閲覧室に入ってすぐに目につく、東側の書架に移動しました。

◆コンピュータ室からのお知らせ

・図書館の開館時間内は原則開室しています。レポート作成や資料調査に活用できます。
・利用にはカウンターでの手続が必要です。座席はその都度指定されます。
・使用できる記憶メディアはFDまたはMOです。内蔵HDおよびCD-Rへの記録はできません。
・プリンタ用紙は１人10枚まで提供します。よく使う人はあらかじめ用紙を購入しておきましょう。

開　館　案　内

7

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

8

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

●は休館日です。
上記以外にも臨時休館日を設ける場合があります。
変更および詳細は学内掲示・モニター・ホームページ等でお知らせ致します。
開館時間は平常通り（月～土　9：00～20：00）です。

大阪商業大学図書館報「ブック村だより」第24号　平成16年5月31日　発行　大阪商業大学図書館
〒577-8505 東大阪市御厨栄町4-1-10　電話(06)6781-5280　FAX(06)6781-0089
e-mail：lib@oucow.daishodai.ac.jp　ホームページアドレス：http://www.lib.daishodai.ac.jp

ISSN 1346-8928